

主の 2017 年 4 月 15 日  
第 94 号 イースター号

日本キリスト教団  
泉ヶ丘教会

牧師 上田 真由美



〒590-0114  
堺市南区榎塚台 1-1-5  
TEL/FAX 072-291-9532  
メール izumigaoka9532church  
@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前 10 時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』

復活の出来事を描く聖書の中で、  
主イエスがマグダラのマリアに出会  
われた場面は何度読んでも深い感銘  
を与えられます。マリアはまだ暗い  
うちに墓に行きました。墓石が取り  
のけてあり墓が空っぽになっていたの  
のを発見します。びっくりして走っ  
て帰り、ペトロとヨハネに「主が取  
り去られました」と告げました。す  
ると、マリアの言ったことを確かめ  
るために彼らも走って墓へ行ったの  
ですが、確かに墓が空っぽだと確認  
しただけで帰って行きました。厳し  
いですが聖書は言うのです。「イエ  
スは必ず死者の中から復活されるこ  
とになっている」という聖書の言葉を、  
二人はまだ理解していなかったのだ  
ある(ヨハネ 20:9)と。



復活の主に出会う

牧師 上田 真由美



彼らが去った後、墓に残ったのは  
マリア一人。そこで「マリアよ」と  
イエス様はお呼びになりました。あ  
る牧師はこう言っています。「ペト  
ロやヨハネのような十二弟子の中の

優等生はみな落第した。復活すると言われていたのに分かっていなかった」と。主が復活されたことを最初に知ったのはマリヤだけです。人々は十二弟子を主に従う優れた弟子だと思っていたでしょう。ところが、彼らは誰も最初に主に出会ったとは書かれていません。墓が空っぽただけ確認して帰ってしまったのです。これはつまり、主に最初にお目にかかる機会を逃したということでもあります。誰よりも最初に復活の主の目撃者となり、その復活の光の中で主の御声を聞いたマリヤという人はどんな人だったのでしょうか。

マリヤは、イエス様に7つの悪霊を追い出して病を癒していただいた後、イエス様に従い、イエス様ご一行を経済的にも支えた人でした(ルカ8:2以下)。また、イエス様が息を引きとられるまで、その傍にいた十字架の死の目撃者でもありました。しかし、過去に忌まわしい事があって(117つの悪霊)、問題の多い人だったのだらうと言われています。そうだとすると、マリヤは人々の模範となるような人生を送った人ではなく、イエス様に従う弟子の中

では最も駄目だと思われた人、汚れた過去あるいは失敗の過去を持っていた人なのです。その人が、聖書の中では、最初に復活の主に出会ったと書いてあります。このことは、惨めな過去、失敗の過去を持つ私たちにとって本当に慰めだと思っております。

マリヤは、イエス様に従った後も厳しい事があったでしょう。過去の失敗を言いふらされたり持ち出されたりしたかもしれません。悩みの多い人だったでしょう。でもそういう自分を、イエス様というお方は、軽んじず愛と憐れみをもって関わり続けてくださった。どん底から救い出し、人生を根底から変えてくださった。その事実ゆえに、マリヤはイエス様を誰よりも愛したのだらうと言われています。その証拠に、この復活の朝、ペトロとヨハネとマリヤが墓に行きました。ペトロとヨハネは、墓は空っぽだと確認すると、さっさと帰って行きました。イエス様の側近とされ毎日寝食を共にしていた彼らは、“ここに遺体がないのなら仕方ない。誰かが持って行ったのだらう”くらいにしか考えなかったから帰ったのだらう。常識的な判断で

す。でも、マリヤは残っていました。罪深い自分がイエス様から愛されたことをよく知っていたマリヤは、イエス様の行方が分かるまではあきらめることができなかつたのでしょう。ルカ福音書7章に、罪深い婦人がイエス様に香油を注ぐ場面があります。ある神学者たちは、この婦人は



マグダラのマリアだろうと推察しています。この婦人は、イエス様がフアリサイ人の家で食事をされるのを知り、その家に入って行きます。そして、イエス様の足を水ではなく溢れてくる涙で濡らし、手ぬぐいではなく自分の大事な髪で拭きました。その上で、香油と言ってもある限りの財産を使って手に入れた最上の香油をみ足に注ぎました。少しおかしくなっただけではないかと思えるのに、イエス様は「この婦人のしたことは福音が語られるところどこでも語られるだろう」と。これは、最高の褒め言葉と言えるでしょう。また、地上のどの場所でも語り伝えてほしいという願いが込められているでしょう。

ある牧師がこう言っています。「この婦人が立派な格好をして堂々とここに乗り込んで来たら、キリストはこれほどに打ち解けた様子はお見せにならないだろう。そのような人とキリストとはどこにも繋がる所、触れる所がないから。しかし、主の足を濡らすほどに涙が出る。それは自分のお方のために悔いた涙であり、このお方のあまりに大きな赦しの愛

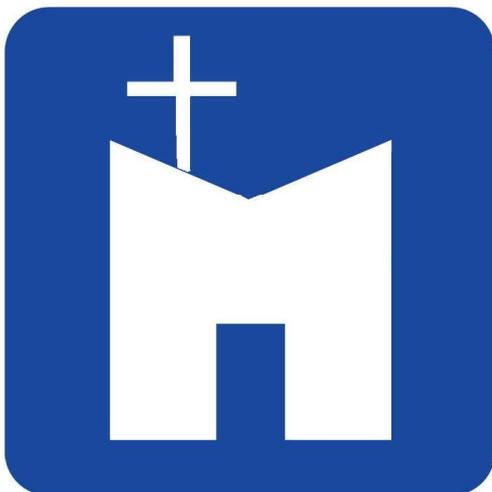
を感謝する涙でしょう」。イエス様と私たちが関係あるのは、私たちが立派だからとか偉いからとかではなくて、神様との関係を破綻させてしまった罪人だからです。主の十字架の死と復活は、罪人のためだったのです。主の十字架と復活の恵みを感じ謝するというのは、このマリアのようにならなければならないでしょう。

ペトロはごく普通の人でしたが、漁師としてまじめに歩んだ人です。主に従った人ですが、泥まみれの生活から救い出されたマリアと比べると、こんな自分が救われたという思いは少なかつたのかもしれない。ペトロやヨハネもあとでそのように変わっていきましました。でも、主が復活された時はまだマリアのようにイエス様を信頼していなかったのです。

私たちが、自分は社会的にも信仰的にも優等生だと思っているならば、復活の主に親しく出会うことは難しいでしょう。その傲慢さが主にお会いする機会を逃してしまふからです。自分には何も誇るものがなくて、自分はこのお方の愛と憐れみによつ

てでしか生きることできないし平安もない。自分はこれからだって迷い出るかもしれない。心揺らぐかもしれない。敵がいるかもしれない。でも、確かな救いをもたらしてくださったこのお方がおられる限り、自分は安心なのだ。時には厳しい主であるかもしれないけれども、このお方が先立ってわが行く道を備え守り、その御旨を成し遂げてくださるに違いない。主の復活の朝、私たちはこの信仰をもって主の復活を祝いいたいと思うのです。

Ω





## 共に生きる生活

前川 直美

マリヤ会にて、松永先生が選んでくださった、ディートリヒ・ボンヘッファーの「共に生きる生活」を読みました。

この本は牧師研修生の共同生活の経験をベースに書かれました。交わりの中において自分がどう神に向き合うべきかを語っています。牧師や信徒たちの学びと実践のための手引書のような本です。

翻訳の読みにくさに加えて、国も環境も違う私たちには難解なものでした。一章の「交わり」を読んでいる頃には、何のことかちんぷんかんぷん。難しく、歯が立たない気がしました。

「これ、どういう状況？ 私たちには関係無いね。そんなこと言われても現実的では無いよね。」

今思えば背景にとらわれ過ぎていたように思います。

けれど、回を重ね読み進めていくうちに、このフレーズは私に語られている。語られる真理に、心を射られ、叱咤激励されている自分がありました。

ラインを引く箇所が増えました。置かれていた立場を超えて普遍なるものを感じました。敵しい本でありました。けれど、共に読むことの喜びと恵みを感じた本でもありました。

Ⅳ章の「仕えること」の中でボンヘッファーは「奉仕」について語ります。

『聞くという奉仕、隣人に対する唯一のまことの奉仕は、神のみ言葉を持つてする奉仕であるが、第一の奉仕はその人の言葉に注意深く耳を傾けることである。語ることよりも傾聴することの方がもっと大きな奉仕でありうる。私たちが神の言葉を持つて語る事ができるためには、私たちが神の耳を持つて聞くべきなのである。』

この章は、特に私に自分の姿勢を問うものでした。語るよりも傾聴することの方が奉仕である。このことは目か

らウロコ」でした。

悩む人に、病む人に何か言ってあげたい、慰めてあげたい。いつも言葉を尽くして語ろうとしてしまいます。でも、その前に聞かなくてはいけなかつ





たのです。最初のそして一番できていない奉仕は聞くことでした。  
 そしてこの章は、『教会は華やかな人格を必要としているのではなく、イエスと兄弟たちに対する真実の仕え人を必要としているのである。』と結ばれています。私の賜物を活かして仕え人となることについて深く考える機会になりました。

マリヤ会は、小さな集会でした。毎回5、6人。4人の時もありました。でも松永先生を囲んで「共に生きる生活」を読みながら静かに考えた大切な時間でした。  
 先生の体調により途中で終わってしまつたこの本をいつかみんなで見たいと思つています。  
 Ω



### 善いサマリア人の話

野々下 陽子

ルカによる福音書10章25節から始まるとても有名な聖書の箇所です。私の聖書に書き込んである日付から、礼拝の説教や平日の学びの時に少なくとも4回は聴いています。語られていることは奥が深く、わかつたようでまだよくわかつていないのだらうな、と今も思います。

松永先生と聖書の事をお話した中で、この善いサマリア人の話が忘

れられません。

もう十年以上前のことで、先生が泉ヶ丘教会に赴任されてきてまだ1、2年の頃だったと思いますが、教会の集会室で松永先生もいらして数人で雑談をしていた時にこの箇所が話題に出てきて、私は先生に「クリスチャンは追い剥ぎにあった人を助けたサマリア人のようになるように」と言われているのではないんですか」と言うような事を質問しました。先生は、「ここには色々な登場人物が出てくるけれど、あなたは自分をその中の誰として受け止める？」と逆に聞かれ、続けて先生は「善いサマリア人はイエス様が出来た事で、自分は、イエス様から瀕死の人を介抱する事を託されて仕事をやる宿屋の主人かな、と思うんだよ」と返されました。「え？何で？あの話の終わりに『行ってあなたも同じようにしなさい』ってイエス様が言ったと書いてあるのに」と直接先生に迫ったか記憶はないのですが、納得できないままでその時間は終わって、「示される答えは一つ」と思いこみがちな私はその日心がもやもやして家に帰りました。教会や家庭集会で何千

回と先生の話を聞いてきた中で、一番にはつきりと思い出されるのがこの出来事です。

今は、私の質問はどうも的外れだったのかな、と思っています。あの時、イエス様という特別な服を着せて貰って意気揚々、ひたすら前進、と高ぶっている私が先生の目には映っていたのかな、と思い返してみたりします。

この聖書のお話、追い剥ぎの話の前に、一人の律法の専門家がイエス様に話しかける事から始まっています。

イエス様を試そうとして会話が始まったと聖書は書いています。この人はよこしまな思いを持って、どうしたら永遠の命を得られるのか、と



イエス様に問い、イエス様は律法に何と書いてあるか問い返します。その人は「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」と答え、「それを実行しなさい」とイエス様が言えば、

「私の隣人とは誰ですか」と、自分が関係を持つ人を限定して考えている人物です。対するイエス様は、相手の思惑に動かされることなく静かに真理を語り、まっすぐに向かい合っ

てその人に話を続けていきます。あらためて読んで、この場面だけでもイエス様の威厳が感じられます。そして、追い剥ぎに襲われた人の話が始まります。

くのような人でなく、徴税人のようなものでもない事を感謝します。」神様の律法は守っていますと祈る話が出てきますが、そこを学んだ時に、自分を信頼しているファリサイ派の人の心が私の心だとすばり言い当てられて、自分の事が一つわかりました。

自分の計画を中断される時、自分の決まりごとに縛られている時、自分の好みを優先する時など、私も状況によって十分祭司やレビ人と同じ事をする可能性があつて、自分の事はなかなか自分ではわかっていないんだと知りました。

善いサマリア人の話では、イエス様は話し終えると「あなたは誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と律法の専門家に質問します。イエス様と出会う人の話には大転換が示されています。「私の隣人は誰か」と考えているこの人にも向き合つて「あなたが誰かの隣人になるように」とイエス様は言われます。聖書では、この律法の専門家がこの後どうしたかは書かれていないのでわかりませんが、一つのお話に隠されている事が数多くあることを



教えられます。  
松永先生との13年間、先生が聖書にあるたくさんの宝の言葉を語ってください、いっぱいのお付きを与えられてきたことを本当に感謝しています。

そして今、上田先生が私たちに御言葉に隠された宝をまた語って明らかにしてくださいます。このように神様が途切れることなく私たちに与えてくださる恵みによって命が保たれていることを思い、今日も感謝して、そしてこれからの一日一日も過ごしていきたいです。 Ω



### 私の大好きな教会暦は、 イースター

村田 幸子

私はイースターが大好きです。神様の「愛」を身近に感じるからです。毎日のようにカメラを首からぶら下げて、被写体を探して歩くのが日課になっていく頃です。自然と向き合って写真を撮り歩いていると、私はこの美しいそして偉大な自然を下さった神様への感謝の念に駆られます。  
私たちは、神様から命を与えられました。私たちの体は神様の体に似せて作られました。そんな私たちはいつの間にか神様に感謝することを忘れて、自分の体に手を加えて、お化粧をしたり着飾ったりしています。

中には神様から与えていただいた顔を変えてしまう人もいます。神様はどんなに悲しんでおられることでしょう。

自然の中に入ってレンズを向けていると、この花たちは、雑草たちは、木々たちは、生き物たちは、自然のままに生き、季節が終わると土の中に帰り、また季節がやってくる、同じ資格好で同じ場所に帰ってくる。私は、そんなまた同じ場所に去年撮った自然を撮りに行きます。そんな時、神様の愛を感じ、感謝するのです。去年咲いた花は今年も同じ花、そして同じところに咲いてくれます。そこに私は神様の復活の業を感じます。

どんなに小さい花でも、作られた花壇でなくても自然の中で季節が来れば必ず、「おはよう！」とほほ笑んでくれる。この4月は一度にいっぱいのお花がいつものように毎年のように咲くのです。なんて素晴らしい季節なんでしょう。だからイースターが大好きなのです。

天にましますわれらの父よ、願わくは御名をあげさせ給え。御国を



来たらせ給え。御心の天になるごとく、地にもなさせ給え。我らの日耀の糧を今日も与え給え。

我らに罪を犯すものを我らが許す如く、我らの罪をも許し給え。我らを試みに会わせず、悪より救い出し給え。国と力とは限りなく汝のものなればなり。アーメン

どんなに上手な言葉で祈るよりも、主の祈りを大切に祈りながらイースター、毎年めぐりくるイースターを感謝して毎日をすごします。 Ω



### 生涯の日を

### 正しく数えるように

### 教えてください

中山 アイ子

復活の主を賛美いたします。

私たちは、松永先生のご召天という大きな悲しみの中にいます。主は私たちの思い悩みを顧みて、「私を愛するか」と私たちの歩みを見守って下さり、慰めと励ましをもって導いて下さっていると信じています。

私たちは、上田先生という力強い導き手である牧者を迎えることができました。

人知では計り知れない神さまの恵みを心から感謝しています。

「あなたは眠りの中に人を漂わせ朝が来れば、人は草のように移ろいま

す。

朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろいタバにはしおれ、枯れていきます」

詩編 90 編 5〜6 節

昨年秋、イタリアのトスカ地方にある廃墟となったサンガルガノ修道院を訪れました。

ここは、13世紀の半ばには、シトー派の最大の修道院でした。しかし、今は、屋根もなくなり、窓ガラスのステンドグラスもなくなり、廃墟となってしまうています。ここは、中世のロマンに浸れる神秘的なスポットです。

秋の気配が立ち込めるなか、糸杉の並木道を楽しみながら修道院まで歩きました。中世に舞い降りたかのように静寂が覆っていました。

落ち葉が道を埋め、黄色の絨毯が敷かれたような美しい序奏に導かれた状況は、まるで油絵の世界です。

サンガルガノ修道院は、俗世間から遠く離れた閑静な場所に建立されました。「祈り」と清貧・貞潔・



服従の生活の場であったシトー派の修道院ですが、現在は柱と壁だけが残る廃墟となっています。

石だけで出来ている建物は、雨風にさらされ、削られている所もあり、経てきた歲月の長さを物語っていました。

1328年に飢饉が襲い、その20年

後にペストが蔓延したこと、修道院が傭兵によって略奪されたことなどが原因となり、修道士の数が激変してしまいます。150年後には、天井を覆っていた屋根の鉛も売り払われ、てしまい、一挙に建物自体の衰退へと向かいます。

1579年には、バラ窓のステンドグラスや、窓ガラスは全て割られ、修道士がたった一人になるといふ厳しい状況になってしまったのですが、全盛期にはどのくらいかの修道士たちがいたのでしょうか。

こうなると衰退はどんどん進み、アーチが崩れ始め、また雷が落ちるといふ災害に見舞われ、鐘楼は崩れてしまいました。

残っていた大鐘も溶解され、青銅として売られます。神聖を失った建物は、修道院としての機能はありませんが、ここで、祈りと清貧の生活をし、信仰を頑なに守った修道士たちがいたという歴史は残りました。

1929年に、新しく修道院を造らず現状のままを保存するという選択をして修復が始まり、現在に至ったのです。バラ窓と側壁と柱だけになった空間に立ち不思議な感覚に襲われ

ました。

聖堂内部の身廊や祭壇に、窓から差し込んでいた光だけで薄暗く神秘的な礼拝堂でしたが、屋根が無くなってしまったがために、すべてに光が差し込み、神聖な教会としての建築空間は無くなってしまいました。明るくなり、かえって儂さを感じさせられました。「国破れて山河在り」の無常を思いました。

しかし、200年代のオリジナルのイタリヤ・ゴシック建築の貴重な様式や構造図が分かりやすくなったと思います。

かつて沢山の修道士たちが厳しい戒律を守り、清貧の生活をしていた状況が脳裏に浮かび、夕べにはおれて枯れてしまう、儂くもろい存在を思いました。

人が造ったもので、永遠に残るといふものではなく、自然も人間も歴史もことごとく無常です。

旧約聖書に千年といえども神さまの目には、昨日が今日へと移る夜の一時にすぎないと書かれています。

永遠という時間の前に、人生は、あっけないものであることを、瞬間に時は過ぎ、私たちは飛び去るこ

とを、サンガルガーノ修道院の廃墟に立ち、考えさせられました。

人を拒否しているかのような「石」の冷たさと、人が求めてやまない木の温もりのような「光」の暖かさが、交差している空間が回廊であり、また、修道院の最も修道院的な所は、回廊の庭だと思えます。

外部の世界から遮断された回廊の中で、祈りながら聖書を読み、黙想や瞑想する修道士たちの祈りの声が響いているようでした。

松永政和先生は、厳しい病魔と闘いながら、先生亡き後の泉が丘教会の将来を思い、常に祈ってくださいといたことを心から感謝いたします。不安と悲しみを乗り越えて、上田真由美牧師と共に、新しい礼拝生活を守れますように祈ります。

イエスさまが死を克服して復活されました。

復活の喜びを心から讃えます。

主に在りて

Ω



### キリスト教基礎講座の働きを通して

時武 哲也

昨年7月、松永牧師から体調があまり思わしくないので、今後のことを考え主の日の礼拝を第一として準備していきたいとお話があり、私の方でキリスト教基礎講座を担当させて頂くことになりました。

キリスト教基礎講座は、日曜日の朝午前9時30分から午前10時頃まで主の日の礼拝前に行なわれています。私はもちろん松永先生のように御言葉を語れるわけではありません。しかし主は、その働きをせよと言われたのです。

私のような者がどこまで出来るの

か不安でしたが、自分ができる準備をすればいい、主の導きを信じ、この講座へ招かれた方々と一緒に御言葉を聞き進めて行くことと考えました。学びの教材は「みんなのカテキズム」という教理問答書を引き続き用いました。問答書ですの「問い」と「答え」があります。さらにその答えに関連した聖書箇所が続いて記されています。御言葉に聞き、主が何を語られているのか一緒に考えながら学びの時間を持ちました。

最近キリスト教基礎講座で扱った問いと答えの内容を少し紹介したいと思います。

「問い」 どうしてわたしたち人間はしばしば破壊的な、悪意ある仕方振る舞うのですか。

「答え」 私たちが神様に背き、罪に陥っているからです。

そのあと関連した聖書の箇所として創世記の部分が書かれています。

人が神に背き、罪を持つようになったのはなぜか。それは神がエデンの園に生えさせられた善悪の知識の木をアダムとエバが、神の言葉に従わ

ず、蛇の誘惑の言葉に耳を傾けその木の実を食べてしまった為と聖書に記されています。

なぜ神は、アダムとエバが罪を犯してしまふ恐れのある、そのような木を生えさせられたのか？

この箇所はキリスト教を信じられない人はもちろん、クリスチャンでも疑問に思われている方がおられるのではないのでしょうか。聖書をよく読んでいくと、神がどのような思いで人を創造されたのかが見えてきます。

今読み進めているところですが、「まな」を読んでいただいている方にもご一緒に考えて頂ければと思います。考えていく上で鍵となる言葉をまとめてみました。神様はどのようなお方なのでしょうか。

・神はアダムとエバが生きていく為に十分な食べ物や環境を与えられていた。

・人が食べてはいけないのは、善悪の知識の木の実だった一つだけ。

・神は人を神の言うとおりに動くロボットとして造られたのではない。神は人を愛おしみ、自由意思を持ち行動できる存在として造られた。

これは人を思う神の限りない愛ではないのでしょうか。

・神は人に善悪の知識の木から取って食べたら必ず死ぬと忠告された。

・神は人を信頼された。人がたとえどのような誘惑を受けても、私の言葉に従ってくれる。善悪の知識の木から取って食べることはない。

・しかし人は神の言葉に従わず、蛇の誘惑の言葉に耳を傾け、自ら「死」を選び、神との信頼関係を壊してしまった。

・神から離れてしまった私たちは、罪の中で生きていくしかありません。

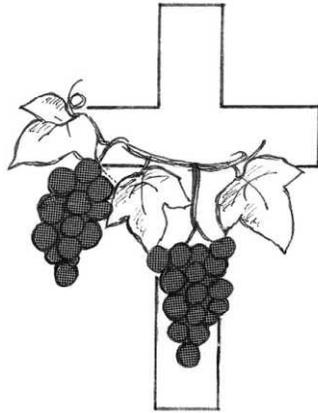
そんな私たちを罪の中から救い出し連れ戻すために、神は神の独り子イエス様をお与えになった。イエス様は私たちの罪の身代りに十字架に架かって下さり、三日目の朝、復活された。イエス様のご復活により神はもう一度私たちが神のもとに帰る道を開いて下さった。イースターの恵みがここにあります。

信仰生活では主の日の礼拝を守ることを第一とし、主を賛美し御言葉に生かされ、主をほめたたえて歩んで行きます。それでも私たちは家庭



や友人との事、地域や社会の中で悩み、どのように対応していったらいいのか分からなくなることがあります。又信仰を求めておられる方も、様々な事柄で悩まれることがあると思います。

キリスト教基礎講座はそんな私たちの為に、主が備えて下さった大切な時間だと思えます。御言葉を通してより深い信仰的な交わりの時を持ち、お互いの悩み、普段感じている様々な思いを共有して語り合い祈りあう、そのような場として主は用い



て下さっています。そして一人一人が礼拝に向けて備えられるのです。この恵みをもっと多くの人にも味わっていただきたいと願います。キリスト教基礎講座は5月から上田先生に導いて頂き再開される予定です。みなさんも主が用意して下さっているこの交わりに加わりませんか。主は私たちの信仰生活をさらに豊かにして下さいませ。



あなたの知らないところで

時武 弘子

3月も中旬を過ぎた主の日の朝。皆さんが礼拝に集ってこられた。明るく挨拶を交わす受付。その場が「おめでとう！」とあたたかな喜びの声であふれた。

実は先週、高校受験の合格発表があり、我が家の娘も受験生で、多くの方々が気にかけてくださっていた。おそろおそろ「どうだった？」と声をかけてくださり、「合格しました」との報告に、皆が安心して喜んでくださった。

「ここまで心配して祈ってくれて



いたんだ」と改めて知らされた。だが当の娘は、中学生になる前から教会に来ていない。周囲の人と違うことに敏感に反応するようになった娘は、教会を拒むようになった。それに留まらず、学校へ行くのも、何をしてもしんどくなった。私はどうする事も出来ず、手こずる事しばしば。けれど私はいつも支えられてきた。神様は共に御言葉に聴き、私の言葉に耳を傾けてくれる兄弟姉妹を与えて下さっていた。迷惑をかけた事もあった。けれどゆるされてきたことを思う。そしてこの日を迎えることができた。皆さんのあたたかな笑顔と喜びの声につつまれて思った。「あなたの知らないところで、こんなにもあなたの事を思って、一緒に喜んでく

れる人たちがいる！それが教会なんだ」って娘が本当に知る時が来る事を。  
Ω



### ルターのバラ

長澤 真理

今年ルターの宗教改革後五百年です。ドイツでは様々なイベントがあるようです。ライプチヒの友人からは、ルターのバラというシンボルマークのマグネットと以下のような説明のカードが送られてきました。

「ルターのバラは、プロテスタントルター派の教会のシンボルマークとして重く用いられています。  
マルチン・ルターが1509年から1512年の間過ごしたエアフルトにあるアウグスチヌス修道院の窓はその典型的なものでした。

このバラは、1530年以後のザクセン選帝侯、寛大なヨハンフリードリッヒの指示で、ルターのためにデザインされたものでした。以来彼は自分の手紙の印として使用し、それは彼の目に見える信仰の表示でした。1530年7月8日の手紙には、彼の優れた神学の特長が明らかにされています。

「始め十字架は、心の中でその元来の色の黒色。それは私の十字架の信仰が私達を祝福してくれることをおぼえているため。なぜなら、人は心から信じて義とされるから。今は、黒い十字架かもしれないが、そしてつらく苦しいかもしれないが、心はその色の中にあるにもかかわらず、人間性はダメにならず、殺されることもなく、命を受ける。この心は白いバラの中央にあり、信仰は喜び、

慰め、平安を与えることを示している。それ故バラは白で赤ではない。なぜなら白は聖霊や全ての天使の色である。このバラは天国色の野に咲き、霊の信仰による喜びは、未来の天国の喜びの始まり。今や、すでにその中に捕まれ希望を通して捕らえられている。でもまだ明らかにはなっていない。そして、その金の輪は、金が最も高貴で高価な鉱石であるように、永遠に続く、終わりのない祝福、そしてまたすべての喜びや、良きものに勝って高価である。」

マルチン・ルター

1483年11月10日アイスレーベンで生まれ、1546年2月18日エベンダで死去  
Ω





## 洗礼を授けられて

奥田 佳也

僕はかなり前から「受洗を受けるのはどうということなのか?」ということを考えていました。しかし今まで自分の周りで受洗をした人は皆さん僕よりも年齢が上の方だったので、「まだ自分には早いのかな?」と考えていました。しかし一昨年のイースターに、夏期学校で知り合った年齢が一つ下の友人が受洗をすることになり、その頃から自分の中で受洗というものを少し身近なものに感じようになりました。それで降自分の中で自問自答を繰り返しながら、考えにふける日々が続きました。そして昨年の夏期学校の時に、様々な

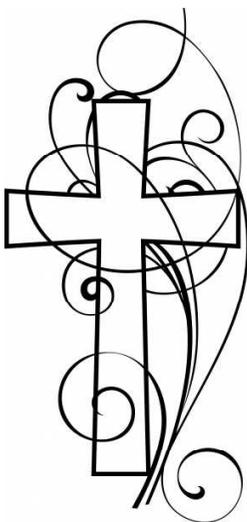
人に相談させていただき、いろんな話を聞かしてもらった中で、自分の中で気付かされたことがあります。

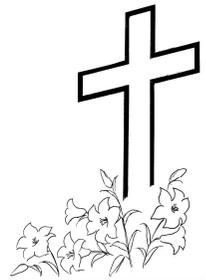
まず洗礼を受けるということは信仰生活のゴールではなくスタートだということだと思います。それまで僕は聖書に書かれていることを全て理解し、教会のことについて全てを知っていませんでした。僕は中高生の間教会に行けていない期間の中でも、心のどこかで教会を忘れることができません、モヤモヤした日々を過ごしていたことを覚えています。大学生となり再び教会に通うようになって毎週御言葉を聞くようになり、これまで以上に真剣に御言葉を聞くことができるようになったと感じるようになりました。そしてこれからも聖書のことを学び続けるために、洗礼を受けようと思った。また僕自身は松永先生から受洗を授けて欲しいという思いが強く、先生の体調のこともあったので早めにしたほうがいいと言われ、松永先生に相談させてもらい、昨年のクリスマスに受洗を受けることになりました。

クリスマスに洗礼を授けてもらっ

た後、松永先生の体調が優れなくなり、先生は二月に天に召されました。僕の記憶の中では、泉ヶ丘教会にはいつも笑顔で僕を迎えてくれる松永先生がいました。そんな先生が急に天に召されたことは信じることがなかなかできず、起きている事実を受け入れることもなかなかできませんでした。これまでたくさんの方を教えてくださった松永先生には感謝してもしきれない思いがあり、先生を天へと呼び寄せた神の御心は何なのか?と考えさせられます。そんな簡単に御心を理解することはできないと思うので、まずは松永先生に教えられた「礼拝に毎週出席する」ということを大切に、上田先生のもとで信仰生活を送りたいと思います。

Ω





## 「コーリング」

斉藤 一実

今年は、宗教改革五百年の年になります。

一五七七年、マルティン・ルターがヴィテンブルグ城で九十五箇条の提言をしたことに始まります。(余談ですが、一昨年主人とドイツ旅行をした時にヴィテンブルグの街で道に迷いました。道を聞くと親身になって教えてくれた人に何人も出会い、街は清楚で、クリスマスの飾りつけもシンプルだけれど、人の温かみを感じたものです。)

当時、中世カトリック教会では、免罪符という天国行きの切符を買えば救われるという制度が蔓延っており、それにルターが疑問を抱き批判しました。

そして「聖書のみ」「信仰にのみ(行ないによらない)」「恵みにのみ」人間は救われるのであり、教皇制度を批判し「全信徒(万人)は祭司」であると説きました。その流れでカルヴァンが「この世で神の栄光のために生きる」ことの大切さ、「仕事は神様から与えられるもの」という生き方を説きました。私は改革派教会で洗礼を受けましたから、その考えは自然に受け入れさせてもらいました。神様はどんな人間であっても愛され、賜物を与えてくださっています。その賜物によって神様は召してくださいます。

仕事のことを英語で「calling」と言いますが、神様から call(呼びかけ)されたことという意味からきているそうです。

私は小さい時から引っ込み思案で、学校でも教会でも、親や友達の陰に隠れていました。教会学校の先生からも「ちゃんとあの子は人前や社会に出ることが出来るのだろうか」と心配されていたほどです。その弱さは自分でも悩んでいましたが、進路を決めないといけない高校3年生のある日、思い切っ

て、父親に相談しました。父親は「人に信用されるかどうかは、話がうまいかどうかによるものではないよ。しゃべるのが下手だから、出来ないわけではないよ。リハビリテーションの仕事はええぞ」と、私を応援してくれました。

その言葉に励まされ、障害を持った子どもやお母さん方と関わる仕事につくことになりました。よく「えらいですわね」なんて言われますが、とんでもありません。人を傷つけてばかりです。利用してくださっている子どもたちの保護者から苦情を言われますし、自分の仕事能力の出来なさに行き詰まることば



かりです。そんな時、はじめは自分の頭の中でなんとか解決しようと思しますが、どん底にはまるばかり。祈ろうとしても言葉にならないうめきの祈りしかできません。

そんな時、思い起こすマザーテレサの大好きな言葉があります。「大切なのは、どれだけたくさんのことをしたかではなく、どれだけ心を込めたかです」「小さなことにいつも誠実であるように努めなさい」「この言葉を心に刻み直し、「神様、どうか助けてください。思い返してみれば、確かに心ない態度や言葉かけをしてしまいました。ごめんなさい。今日一日、過ちをおかすことなく、お仕事できるように、見守っておいってください。神様からいただいた愛の心を持って子どもやお母さん方に接することが出来ますようにしてください。」と祈っています。でもまた、同じような失敗を繰り返し続けています。この仕事について30年経ってもです。しかし神様は、こんな弱い私を遣わせてくださっているのです。たまにお会いする教会学校の先生もびっくりしてくださいます。ちょっとは大きくなっ

たのでしょうか。これは全て神様のご計画のうちのこと、神様が見守って強めてくださっているからに他ないものと信じています。感謝です。

そして、また、こんな弱く、幼く、欠けの多い私に神様は、今度は泉ヶ丘教会のために長老として働きなさい、と呼び止められました。逃げられるなら、逃げたいという気持ちがありましたが、神様がおっしゃることに従うしかありません。罪のために、愛に乏しいために、人を傷つけ、失敗ばかり繰り返すことと思いますが、牧師先生、長老会、教会員の皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

むなしの器

マルティン・ルター

ごらんください、主よ、満たされる必要のあるむなしの器を。

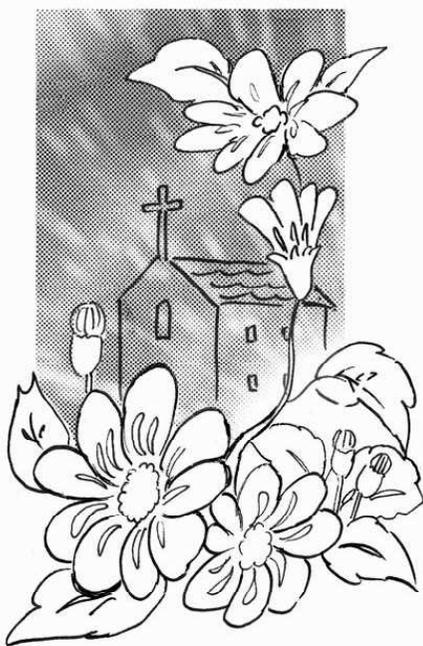
わたしの主よ、どうかこの器を満たしてください。

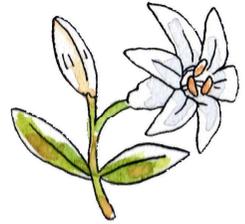
わたしの信仰は弱いのです。どうか、強くしてください。

わたしの愛は冷え切っています。

わたしをあたたため、わたしを熱し、わたしの愛が隣人に届くようにしてください。

アーメン





## 牧師の死と「言」

松永 恵子

今から六年前、松永牧師は高熱が出て、病院で調べて頂くと肝細胞ガンと診断、手術は出来ず、「手術をします」と。手術とは、足のつけ根からカテーテルを入れ、ガンに液体（抗がん剤）を入れ、ガンを死滅させる。それを半年に一回繰り返す。入院中は高熱が出て、入院期間二週間の内一週間は辛い日々でした。食事療法もカロリー計算や塩分控えめに気を付けながら、しっかりと食べ続けてくれました。九回の入院退院でした。しかし昨年の中頃診察に行きますと一〇回目はないと宣言。来年の桜の花は見られませんかと尋ねますと、

それは無理かも知れませんが、私には「松永先生はこんな元気なのはどうして!」

でも牧師はとても冷静でした。叫びたかっただけでしょう、泣きたかっただけだと思います。そしてもっと生かしてほしいと。これから忙しくなるよ、新しい牧師先生をお願いを東京神学大学に頼むこと。そして私の住まいを整えること。頑張ってください。神さまがこの願いを叶えて下さいました。

今年四月一日付で上田真由美牧師が与えられました。そしてもう一つ恵子の住まいも昨年十一月、教会の近くにマンションが与えられました。松永先生の身体が日々弱っていく中で、毎日二人で話し合いました。何度も何度も。

葬儀の後、牧師室の私物を片付けていると、遺言のようなものが出てきました。

「今はまだ主が生かして下さいますから、別れの言葉は述べません。生きるにも死ぬにも、主を証しする生涯であったことを感謝します。御国への凱旋がどのようなものか判

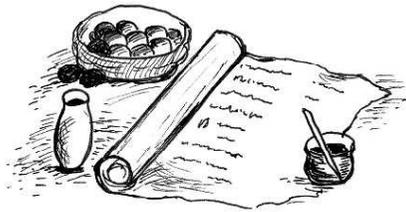
りませんが、近々向かいます。恵子、本当にありがとうございます。私の伴侶にしておさった神様に感謝します。いっぱい嬉しい思い出を二人で作ってききました。もっともっと造りたかったのだけれど、主がお呼びです。暫くは淋しく思い出に耽(ふ)けることでしようが、何時までも拘泥しないで立ち上がって下さい。主イエス・キリストの助けが与えられますように祈ります。陽史、恵美子、そして家族になった圭さん、お母さんを大事に守って下さい。何よりも神さまが守って下さいますが、その具体的な姿があなた方です。良き息子、娘を授けて下さいましたことをありがとうございます。そして、教会の皆様には、私をとてても大事に扱って下さいましたことを感謝です。まだまだいっぱい一緒に聖書を学び、信仰を膨らませていく事を願っていましたが、残念に思います。神さまが全てを仕切ってくださいます。ご迷惑だけを残したかも知れませんが、あれこれ考えなくてもどうにも出来ないのですから…。皆様より少し先に眠りの床につきまます。おやすみなさい。尚、葬儀礼

拝は泉ヶ丘教会でお願いします。司式は堺教会の内田知牧師にお願いして下さい。納骨は泉ヶ丘教会墓にお願いします。そうそう、恵子はああ見えて結構あかんたれの処があります。支えてやって下さい。

ここで皆さんの名を、お一人お一人挙げて祈っていますとなかなか眠りにつけませんから、このあたりとします。本当にありがとうございます。

皆様の上に主の祝福が豊かにありますように。アーメン」

そして、二〇一七年二月一三日深夜、家族に看取られ眠りにつきましました。



## 「主よ、来て下さい」

「リントの信徒への手紙Ⅰ 十六章二十一節

泉ヶ丘教会 長老会

去る二〇一七年二月一三日深夜、泉ヶ丘教会牧師であられた松永先生が天に召されました。二〇〇四年四月より当教会へ赴任されて以来、十三年間にわたってこの教会の礼拝を整えられ、長年の闘病生活の中にあってもこの群れを愛し力強くみ言葉を語ってこられました。先生が御許に招かれたことで私たちは深い悲しみに中に置かれてましたが、主は新しい牧者である上田真由美牧師を備えられ、再びこの教会が神さまのご栄光を表すために用いられ、歩み続けることをお命じになりました。

二千年前のこの同じ時に、主イエス・キリストが私たちの罪の贖いとして十字架にかかれ死なれました。そのとき弟子達は怖じ惑いました。主は復活されました。その溢れるばかりの恵みを聖霊の働きによって知らされた弟子達が、主のみ言葉を宣べ伝えるために世界中に遣わされていったように、泉ヶ丘教会もこの試練の後に、与えられた大きな恵みを神のなされた大いなる業と信じ、讚美し伝道し続けます。

「主よ、来て下さい」、この群れを祝福して下さい。

泉ヶ丘教会は、この教会の歴史を通して示された神のご栄光を礼拝を通して讚美し続けます。皆様どうぞ礼拝にお越し下さい。共に主を讚美しましょう。